

報 告

看護大学生の社会的スキルと状態・特性不安の関連

—学年別と性別の比較—

後藤 満津子¹ 石崎 文子¹ 中井 芙美子¹ 村木 士郎¹
 藤原 理恵子¹ 小泉 千恵子¹ 高橋 尋子¹ 松脇 喜久美¹

抄 録

本研究の目的は、学年進行に伴う看護学生の対人関係の社会的スキルについて状態・特性不安の関連及び変化について学年別と性別を比較検討することにより、看護学生のヘルスプロモーションの課題を明らかにすることである。研究方法は、看護大学生 444 名を対象に社会的スキルと日本版 STAI (状態・特性不安検査, 以下 STAI とする) により状態・特性不安を調査し、関連を検討した。その結果、大学生の社会的スキルと不安は有意に関連があり、社会的スキルと不安が関連していることが明らかとなった。また、学年により社会的スキルに差があることも明らかとなった。社会的スキルの向上は、自己肯定感低下によって、課題が達成できないストレスを軽減し、新たな課題への挑戦や学習意欲の向上につながっていくと考えた。学年や学生の特性に応じた社会性向上への支援の必要性が示唆された。学年間の交流を促進する機会を設け、学習や実習での経験を語るにより学習への動機づけとしていくことが必要であると考えた。

Key words: 看護学生, 社会的スキル, STAI

1. 背 景

現代の大学生は、社会性や適応力の欠如を指摘されており、若者の社会性や適応力、ストレスへの関心は高く、これからの社会を担う人材育成に欠かせない課題である¹⁻³⁾。看護大学においては、専門的知識・技術の習得に加え、国家資格取得、就職活動など学業、人間関係、大学生活におけるストレス因子も多様であり、他学部学生と比較して看護学生は

ストレスが高く、特に4年生になるほど高いことも報告されている⁴⁻⁵⁾。このような現状において学生達のストレスに対処するために教育者達は学生のストレスに配慮する必要があると警鐘をならしている⁶⁾。

私達は、平成 26 年度に看護学生 1・2 年生 203 名を対象に実施した調査⁷⁾において、良好な睡眠状態や定期的な運動が、身体的・精神的健康に影響を及ぼす要因となることを明らかにした。STAI においては、男女ともに状態・特性不安の平均点の評価段階で不安は「高い」と判定された。特に女子学生は男子学生に比べ不安傾向が高く、身体的・精神的健康状態は低いという結果が得られた。また、

受稿：2017年12月15日 受理：2018年4月24日

¹ 広島都市学園大学健康科学部看護学科

〒734-0014 広島県広島市南区宇品五丁目13-18

STAIの学年比較では、1年生より2年生の方が状態不安・特性不安とも高く、とりわけ状態不安は有意に高かった。大学生には、青年期後期ゆえに取り組みねばならない発達課題もあり、看護学生には、各学年でそれぞれ直面する課題があると考えられる。この研究から、高いストレスに曝される可能性のある看護学生に対して、健康な生活習慣を維持できるような健康教育が不可欠であり、男女の特性を踏まえた上で、学年進行に対応した支援体制が必要であることが示唆された。

看護学生は、知識・技術だけではなく、対人関係のスキルも必要とされている。しかし、前述のように、現代の若者は、社会性や適応力の欠如が懸念されており、これらが看護学生のストレスや不安の要因となりうると考える。

そこで、今回の研究では、看護学生の対人関係の社会的スキルと特性不安・状態不安に注目し、全学年を対象として分析を行うことにより、性別との関連や学年進行に伴う変化を明らかにし、看護学生へのきめ細かい支援体制の構築に繋げていくことを考えた。

2. 目的および意義

本研究は、看護学生の対人関係の社会的スキルについて状態不安・特性不安との関連および性別と学年別とを比較検討することを目的とする。その意義は、看護学生へのきめ細かい支援体制の構築に繋げることである。

3. 方法

3.1 調査期間

平成28年5月～平成28年6月

3.2 研究対象および研究方法

3.2.1 対象

対象者は、A大学1年生119名（男性32名、女性87名）、2年生107名（男性15名、女性92名）、3年生111名（男性22名、女性89名）、4年生107名（男性24名、女性83名）。

3.2.2 調査方法

社会的スキル尺度（KiSS-18 以下 KiSS-18 と示す）、STAIの調査用紙を配布し、回収はA大学内に設置した回収ボックスへの投函により実施した。

3.2.3 調査項目

1) 基本属性：学年，年齢，性別。

2) KiSS-18 (Kikuchi's Scale of Social Skills-18 items, 菊池 1988)：菊池章夫（社会心理学研究者）がGoldstein, Sprafkin, Gershaw, & Kleinの「若者のための社会的スキル」リストをもとに作成した若者用スキル尺度であり、信頼性及び妥当性も広く確認されている⁸⁻¹⁰。質問項目は18から成り、下位尺度は初歩的なスキル、高度のスキル、感情処理のスキル、攻撃に代わるスキル、ストレスを処理するスキル、計画のスキルの6つの側面を含んでいる。回答方法は「いつもそうだ」「たいていそうだ」「どちらともいえない」「たいていそうでない」「いつもそうでない」の5段階評価である。18項目の得点が高いほど対人関係の社会的スキルが高いことを示し、対象者（回答者）が認知している対人関係における社会的スキルの程度を測るものである。

3) 日本版 STAI (STAI)：STAI 状態・特性不安検査 (Form X) 原著者は、Spielberger CD である。質問項目は、個人の状況要因に影響されず長期的な不安の強さ（特性不安）とそれぞれの場面で一過性に感じる不安の強さ（状態不安）を測定する検査表である。評価方法は、状態不安尺度20項目、特性不安尺度20項目の質問事項から成る。20項目の状態不安尺度で不安を喚起する事象に対する一過性の状況反応、20項目の特性不安尺度で不安体験に対する比較的安定した反応傾向を査定する。以上の各20項目それぞれの不安存在項目と不安不在項目の得点を査定し、状態不安尺度、特性不安尺度を20～80点に得点化し、～Vの5段階評価（Iは非常に低い、Ⅲは普通、Vは非常に高い）をする。本検査により、不安になりやすい性格傾向（特性不安）と刻々と変化する一過性の不安状態（状態不安）と

に区別して不安の存在を評価することができる。企業等での組織的なメンタルヘルス、各種病院・福祉施設等での臨床用、学生相談、産業カウンセリング、そして研究用の資料として利用されている。

3.3 データ分析方法

KiSS-18の学年別・性別による比較、STAIの学年別・性別による比較をKolmogorov-Smirnov検定を用いて、データの正規性を確認後、性別はt検定、学年別は一元配置分散分析を用いて検討した。KiSS-18とSTAIの特性不安・状態不安の相関は、Pearson積率相関係数を用いて求めた。

統計解析には、IBM SPSS Statistics Ver.24 for Windowsを用いた。全ての検定におけるp値は両側であり、 $p < 0.05$ を有意差ありとした。

3.4 倫理的配慮

本研究の実施に当たっては、広島都市学園大学倫理審査委員会の承認を得た（第2014003号）。対象には、本研究の目的、方法、内容、本研究の参加をいつでも拒否できること、拒否しても不利益は被らないこと、プライバシーは厳重に保護されること等を口頭と書面を用いて説明した。得られたデータは個人が特定されないよう記号等を用いて厳重に保管した。また、論文発表は本人が特定されることがないように十分な配慮を行うことを説明した。その後、同意を得られた対象者へ自己記入式質問紙への記入を依頼した。

4. 結果

4.1 対象者の基本属性

対象者444名のうち403名より回答があった（回収率90.8%）。その内、記入漏れを除外した1年生103名、2年生97名、3年生104名、4年生86名、計390名（有効回答率96.8%）を研究対象とした。性別は、女性308名、男性82名であり、平均年齢（歳）は、 20.05 ± 2.42 であった。

4.2 KiSS-18 調査結果

Kolmogorov-Smirnov検定を用いて、データの正規性を確認した。

4.2.1 KiSS-18 (性別) (Table 1)

KiSS-18は、すべての下位項目において、女子学生より男子学生の平均値が高い傾向にあったが、感情処理のスキル ($p = 0.031$)、計画のスキル ($p = 0.014$)、ストレスを処理するスキル ($p = 0.000$)、合計 ($p = 0.019$) で有意差があった。

4.2.2 KiSS-18 学年別 (Table 2, 3)

KiSS-18は、ほとんどの下位項目において、学年が上がるほど低下していった。4年生は、1年生と比較してすべてにおいて低値であった。

各学年を多重比較し相関をみると、1年生と4年生に「初歩的スキル」「高度のスキル」「感情処理のスキル」「計画のスキル」「合計」において有意差がみられた。1年生と3年生は「高度のスキル」「ストレスを処理するスキル」「合計」に有意差がみられた。

4.3 STAIの調査結果

Kolmogorov-Smirnov検定を用いて、データの正規性を確認した。

4.3.1 STAI 性別 (Table 4)

特性不安、状態不安ともに女子学生のほうが高い傾向であったが、有意差は見られなかった。

4.3.2 STAI 学年別 (Table 5)

全体的にI～Vの5段階評価のうちⅢ（普通）からⅤ（非常に高い）という評価結果であった。

特性不安は、1年生、4年生、2年生、3年生の順に高くなったが、学年間の比較では有意差は見られなかった。

状態不安の平均値は、1年生、2年生、4年生、3年生の順に高くなる傾向があった。

4.4 KiSS-18とSTAIの相関 (Table 6)

KiSS-18のすべての下位項目において、STAIの特性不安（段階1～5）・状態不安（段階1～5）ともに有意な負の相関がみられた。特に、KiSS-18の感情処理のスキルとSTAIの特性不安において高い負の相関がみられた。

Table 1 KiSS-18 (性別)

n=390 (女性 308名 男性 82名)

性別		初歩的 スキル	高度の スキル	感情処理 のスキル	攻撃に 代わる スキル	ストレスを 処理する スキル	計画	合計
女性	平均値	9.52	10.09	9.70	9.56	9.50	9.79	58.22
	標準偏差	2.38	1.99	1.92	1.95	1.93	2.24	9.89
男性	平均値	9.82	10.43 ^a	10.23	9.83	10.43 ^b	10.46 ^c	61.19 ^d
	標準偏差	2.61	2.17	1.94	2.10	1.65	1.93	10.15
合計	平均値	9.58	10.16	9.82	9.62	9.69	9.94	58.85
	標準偏差	2.43	2.03	1.94	1.98	1.91	2.19	10.01

t検定 a: p=0.031, b: p=0.014, c: p=0.000, d: p=0.019

Table 2 KiSS-18学年別

		n	平均	標準偏差
初歩的スキル	1年生	103	10.13	2.42
	2年生	97	9.44	2.53
	3年生	104	9.50	2.34
	4年生	86	9.17	2.38
	合計	390	9.58	2.43
高度のスキル	1年生	103	10.71	1.96
	2年生	97	10.33	2.13
	3年生	104	9.86	1.98
	4年生	86	9.67	1.91
	合計	390	10.16	2.03
感情処理のスキル	1年生	103	10.34	1.69
	2年生	97	9.69	2.03
	3年生	104	9.69	1.89
	4年生	86	9.49	2.06
	合計	390	9.82	1.94
攻撃に代わるスキル	1年生	103	10.13	1.92
	2年生	97	9.53	1.97
	3年生	104	9.45	2.02
	4年生	86	9.34	1.94
	合計	390	9.62	1.98
ストレスを処理するスキル	1年生	103	10.13	1.61
	2年生	97	9.65	2.06
	3年生	104	9.42	2.12
	4年生	86	9.57	1.75
	合計	390	9.69	1.91
計画のスキル	1年生	103	10.42	1.94
	2年生	97	9.87	2.27
	3年生	104	9.89	2.30
	4年生	86	9.50	2.17
	合計	390	9.94	2.19
合計	1年生	103	61.85	8.67
	2年生	97	58.51	10.55
	3年生	104	57.93	10.54
	4年生	86	56.74	9.58
	合計	390	58.85	10.01

Table 3 KiSS-18学年比較

		1年生	2年生	3年生
初歩的スキル	1年生	—	—	—
	2年生	0.191	—	—
	3年生	0.246	0.998	—
	4年生	0.037*	0.876	0.792
高度のスキル	1年生	—	—	—
	2年生	0.516	—	—
	3年生	0.012*	0.353	—
	4年生	0.002**	0.121	0.913
感情処理のスキル	1年生	—	—	—
	2年生	0.080	—	—
	3年生	0.073	1.000	—
	4年生	0.013*	0.892	0.885
攻撃に代わる スキル	1年生	—	—	—
	2年生	0.137	—	—
	3年生	0.067	0.993	—
	4年生	0.032*	0.916	0.978
ストレスを処理 するスキル	1年生	—	—	—
	2年生	0.288	—	—
	3年生	0.040*	0.833	—
	4年生	0.188	0.992	0.952
計画のスキル	1年生	—	—	—
	2年生	0.279	—	—
	3年生	0.310	1.000	—
	4年生	0.021*	0.668	0.600
合計	1年生	—	—	—
	2年生	0.079*	—	—
	3年生	0.023*	0.977	—
	4年生	0.002**	0.624	0.842

一元配置分散分析 ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$

Table 4 STAI性別

		n=390 (女性 308名 男性 82名)	
性別		特性不安	状態不安
女性	平均値	49.80	45.48
	標準偏差	10.09	9.72
男性	平均値	48.70	43.96
	標準偏差	10.25	9.80
合計	平均値	49.57	45.16
	標準偏差	10.12	9.75

Table 5 STAI学年別

		n=390 (女性 308名 男性 82名)		
		n	平均	標準偏差
特性不安	1年生	103	47.93	9.82
	2年生	97	50.08	11.01
	3年生	104	50.81	8.97
	4年生	86	49.48	10.42
	合計	390	49.57	10.11
状態不安	1年生	103	42.35	9.28
	2年生	97	43.85	10.23
	3年生	104	47.87	8.90
	4年生	86	46.76	9.49
	合計	390	45.16	9.74

Table 6 KiSS-18とSTAIの関連

n = 390

STAI	Kiss18 (スキル)						
	基本的	より高度	感情処理	攻撃に代わる	ストレス処理	計画	合計
特性不安	-0.210 **	-0.331 **	-0.363 **	-0.265 **	-0.333 **	-0.337 **	-0.378 **
状態不安	-0.218 **	-0.290 **	-0.302 **	-0.239 **	-0.278 **	-0.226 **	-0.317 **

Pearson 積率相関係数 ** p < 0.01, * p < 0.05

5. 考 察

5.1 KiSS-18

KiSS-18の全体平均は58.85点であった。大学生標準化総得点の男女平均53.08点⁸⁾に比べると高い。看護学生は、他学科の学生と比較して対人関係に自信をもち、社会的スキルが比較的高い¹¹⁾との報告がある。看護学生は、臨地実習で看護師や患者との関わり及びコミュニケーション、つまり対人関係の場면을体験することから社会的スキルの向上につながる体験が他学科よりもあることが反映していることが考えられる。

5.1.1 KiSS-18 性別比較

性別では女子学生より男子学生の平均値が高い傾向にあり、「感情処理のスキル」「計画のスキル」「ストレスを処理するスキル」「合計」で有意な相関があった。八木ら¹²⁾は、青年期の対人関係に関する研究において、女子学生の方が男子学生よりも他者に対して照れや気恥ずかしさを感じやすく、対人場面において他者からの受容感が高い傾向がみられたと報告している。今回、男子学生は、女子学生よりも自己の対人関係におけるスキルを高く見積もっており、ストレスをうまく処理していると考えていることが明らかになった。

KiSS-18は対象者(回答者)自身が認知している社会的スキルの程度を測っているものである。男子学生が女子学生より得点が高い結果となったのは、男子学生は対人関係にストレスを感じにくく、一方、女子学生は対人関係について厳しい自己評価をしていると考える。

5.1.2 KiSS-18 学年別比較

「高度のスキル」「感情処理のスキル」「攻撃に代わるスキル」については、学年が上がるにつれて、平均点が低くなっていた。また、各学年間の比較をすると、1年生と4年生に「基本的スキル」「より高度のスキル」「感情処理」「計画」において有意差がみられ、1年生と3年生では「高度のスキル」「ストレス処理」に有意差がみられ、学年によって異なる教育課程や課題の取り組みの影響が考えられた。3年生になると臨地実習により、それまで経験したことのない社会的スキルを発揮する必要に迫られる。このことにより、自己が認知している社会的スキルの程度が低下すると考えられる。一方、1年生は臨地実習など社会的経験が少ないため、社会的スキルを必要とする場面が少ないことから自らの社会的スキルを高く認知していることが考えられた。武田ら¹³⁾の報告によると、「1年生の社会的スキルが高値である要因について、1年生は高校を卒業し、自由な一人暮らしやアルバイトなどの社会経験、交友関係なども安定した状況にあり、自らの社会的スキルを高く認知している。」と述べている。

1年生は、基礎教養科目がカリキュラムの多くを占めている。2年生は医療看護の専門科目が1年生より大幅に増加し、3年生は約8ヶ月間の発達看護学実習および精神保健看護学実習に行く前で、さまざまな課題に追われている時期である。そして、4年生は看護研究に取り組むとともに国家試験を控えている時期である。各学年でそれぞれの課題に追われ結果を求められるという切迫した状況の中で、自信を喪失し、自尊感情の低下にも繋がっているのではないかと考える。また、3年生では、実習での困難な体験が社会的スキルの自己評価を低くさせるこ

とが報告されており、本研究の結果と一致した。

4年生は、3年生の臨地実習で「患者と何を話しているのか分からなくなった」「患者とどのように付き合えば（関われば）いいのか」など患者との対人関係において苦慮した経験が多く、自身の社会性に対して評価が低下していくことが考えられた。

将来、看護職を目指す看護学生にとって、コミュニケーションスキルは重要な能力のひとつである。そして、社会的スキルの向上には、人と関わる事が不可欠である。学生が、臨地実習を通して、対人スキルにおいて自信をなくした時や対人関係において困難な状況になったとしても、教員は、それを学びの機会と捉え、スキルアップのための意味づけを行い、また学生にとって良い経験へとつながるよう支えていく必要がある。さらに、各学年における学習や実習の体験を相互に語り合う機会を設けることで、自身の体験を価値づけることができ、学習への動機づけにつながるのではないかと考える。

5.2 STAI

5.2.1 STAI 性別比較

STAIでは、特性不安では女子学生の方が男子学生より平均値が高く、状態不安でも女子学生の方が男子学生に比して高かった。

大学生の生活習慣およびストレスに関する男女比較の結果では、悩みやストレスを感じる程度は女子学生の方が有意に高いと報告している¹⁴⁾。本研究結果においては、特性不安・状態不安とも平均値は高かったが、有意な差は見られなかった。

5.2.2 STAI 学年別比較

特性不安は、1年生、4年生、2年生、3年生の順に高い傾向にあったが、学年間の比較では有意な相関は見られなかった。

状態不安の平均値は、1年生、2年生、4年生、3年生の順に高くなる傾向があった。特に、3年生は状態不安、特性不安ともに高い結果となっている。

小倉ら¹⁵⁾は、看護学生の95.7%が定期試験や実習などのレポートといった成績、評価などにストレスを感じていたと報告しており、本研究結果においても学生は、各学年において果たすべき課題を抱え

ていることからストレスにさらされていると考えられる。

4年生は、在宅実習や保健師課程の実習、就職試験、国家試験の勉強がある。3年生は、高度な専門的知識の学習とその課題を抱えている時期である。学年が上がるにつれて果たすべき課題が大きくなっていくことから、学年が上がるにつれて状態不安、特性不安が高い結果になったことが考えられる。学生の精神面の把握とともに、不安への対処行動を支援すること、学習サポートが必要である。

5.3 KiSS-18とSTAIの相関

今回、KiSS-18の下位項目とSTAIの特性不安・状態不安に有意な負の相関がみられた。特にKiSS-18総得点はSTAIの特性不安と高い相関がみられた。特性不安は、性格などに由来する不安になりやすい傾向を指す。この特性不安が高いということは、何らかのストレスがかかると不安になりやすく、様々な状況下で感じる不安で強い状態不安が生じやすい。特性不安の高い学生は、特に対人関係において不安をもちやすく、社会的スキルの獲得が困難になり社会性が低くなることが推察される。逆に、特性不安が低い学生は社会性が高いため、対人関係に不安をもちにくく、コミュニケーション能力を獲得し、他者との友好的人間関係を形成できると考える。特に、KiSS-18の感情処理のスキルとSTAIの特性不安において高い相関がみられたことから、これまでの不安への対処行動や対人関係の形成過程の影響が反映していることが考えられる。

仁科らは、社会的スキルはトレーニングによって向上可能なスキルであり、トレーニングによってメンタルヘルスの向上が期待できると考える¹⁶⁾と報告している。教育の中に社会的スキルを向上させるトレーニングを組み込むことによって社会的スキルを向上させることは、不安の軽減に効果があることが示唆された。そして、社会的スキルの向上や不安感の軽減は、看護学生の自己肯定感を高め、新たな課題への挑戦や学習意欲の向上にもつながると考える。

今後は、カリキュラムに社会性向上の学修内容を充実させるなどの教育的介入により、看護学生の社

会的スキルの向上を図り、ストレス対処能力の向上に繋げていく必要がある。また臨地実習は、様々な年齢や立場の人々とかかわることができ、看護学生が日常生活を超えた様々な事象を経験できる場である。そのため、看護学生の臨地実習での経験を細やかにフィードバックしていくことや教員・臨地実習指導者がロールモデルとなり、機会教育を積極的に取り入れることも必要である。こうした取り組みにより、看護学生が、社会的スキルやストレスへの対処行動を身に着けていくことができるよう努める必要があると考える。

6. 結 論

本研究において、看護学生の社会的スキルとSTAIの状態不安・特性不安に有意な負の相関がみられ、特に社会的スキルとSTAIの特性不安では高い相関があることが明らかとなった。学生は、社会的スキルを向上させることで自信をもつことができ、不安への対処行動につなげていくことができる。社会的スキルは、トレーニングによって向上させていくことができるため、大学において社会的スキル向上につながるトレーニングを組み込んでいくことが重要となる。社会的スキルの向上は学生の自信につながり、大学での学修過程における課題に立ち向かう力となる。

今後の課題として、学年別等の組織構成員の状況が研究結果に大きく反映すると思われることから、縦断研究を行いその推移を考察する必要がある。

謝 辞

本研究を実施するに当たり、ご協力いただきました学生の皆様に心より感謝申し上げます。

本研究に関連して開示すべき利益相反関係にある企業はない。

文 献

- 1) 李艶, 酒井悠次. ストレスイベント・ストレスコーピング・社会的スキルの関連についての研究—大学生の対人関係の場合—. 聖泉論叢 2010; 18: 53-65.
- 2) 塗師斌. 大学生におけるストレスとコーピング. 横浜国立大学教育紀要 1993; 33: 241-264.
- 3) 真船浩介, 鈴木綾子, 大塚泰正. 大学生におけるストレスサーの特徴: 認知的評定, 及び心理的ストレス反応との関連の検討. 学校メンタルヘルス 2006; 9: 57-63.
- 4) 今留忍, 小竹久実子. 看護学生のストレスサーと心理的ストレス反応の特徴—保健学科・臨床検査技術学科学生との比較—日本看護学教育学会誌 2009; 19(2): 1-10.
- 5) 市丸訓子, 山本富士江, 野田淳. 看護大学生のストレス度とストレスサー・ストレス反応・影響因子との関連—4年間の横断研究—東京保健科学学会誌 2001; 4(2): 77-82.
- 6) Yamashita K, Saito M, Takao T. Stress and coping styles in Japanese nursing students. International Journal of Nursing Practice 2012; 18(5): 489-96.
- 7) 後藤満津子, 石崎文子, 村木士郎, 重富勇他. 看護大学生の生活習慣と身体的・精神的健康状態と状態・特性不安の関連—大学生の学年別と性別の比較—. 広島都市学園大学雑誌 2016; 2(1): 5-14.
- 8) 菊池章夫. KiSS-18 研究の現況. 社会的スキルを測る KiSS-18 ハンドブック. 東京. 川島書店, 2007.
- 9) 菊池章夫, 長濱加邦子. KiSS-18 の妥当性についての一資料. 尚綱学院大学紀要 2008; 56: 261-264.
- 10) 今野裕之. 対人関係. 心理測定尺度集Ⅱ, 東京. サイエンス社, 2001, 70-74.
- 11) 野崎智恵子, 千田睦美, 布佐真理子, 三浦まゆみ. 看護大学生の社会的スキル. 日本看護学会論文集 看護教育 1999; 30, 74-76.
- 12) 八木成和. 青年期の対人関係に関する研究(Ⅳ)—対人関係における対処行動と友人関係, 対人不安との関連について—. 四天王寺大学紀要 2008; 46, 153-168.
- 13) 武田かおり, 鉢呂美幸, 工藤恭子. 看護大学生の社会的スキルに関連する生活および実習体験. 名寄市立大学 道北地域研究所年報 2012, 30, 21-27.
- 14) 久井志保. 大学生の生活習慣およびストレスに関する性差についての検討. 日本看護学会論文集: ヘルспロモーション 2015; 45: 54-57.
- 15) 小倉由香里. 看護学生のストレスの実態と支援のあり方—対人ストレスコーピングとソーシャル・サポートの観点から—. 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター 看護教育研究集録 2007; 32: 62-69.
- 16) 仁科祐子, 谷垣静子, 乗越千枝. 看護学生のコミュニケーションスキルおよび自尊感情とメンタルヘルスの関連. 米子医学雑誌 =The journal of the Yonago Medical Association 2010; 61, 67-74.
- 17) 近村千穂, 小林敏生, 石崎文子, 青井聡美他. 看護学実習におけるストレスとコーピングおよび性格との関連. 広島大学保健学ジャーナル 2007; 7(1), 15-22.

Relationship between nursing college student's social skills and state-trait anxiety

— Comparison by grade and gender —

Mitsuko GOTOH¹

Shiro MURAKI¹

Hiroko TAKAHASHI¹

Fumiko ISHIZAKI¹

Rieko FUJIWARA¹

Kikumi MATSUWAKI¹

Fumiko NAKAI¹

Chieko KOIZUMI¹

Abstract

The purpose of this study is to clarify the health promotion problem of nursing students by analyzing the relationship between the social skills they acquire as they progress through academic years and state-trait anxiety, regarding different school year and gender. We surveyed 444 nursing college students regarding social skills and state-trait anxiety based on the STAI and examined the relationship. As a result, university students' social skills and anxiety were significantly related and it became clear that social skills and anxiety are related and that social skills differed depending on the grade. Improvement of social skills reduces stress and low self-esteem caused by the inability to achieve a task. It also leads to experiencing new tasks and increased motivation. It suggests that the necessity of supporting social improvement according to grade and student characteristics. It would be beneficial to set up opportunities to promote exchange between grades and to improve motivation for learning by sharing experiences in learning and practical training.

Key words: nursing students, social skill, STAI

¹ Department of Nursing, Faculty of Health Science, Hiroshima Cosmopolitan University
5-13-18 Ujinanishi, Minami-ku, Hiroshima 734-0014, Japan